

Deadly Night-Cap
1953
by Harry Carmichael

目次

ラスキン・テラスの亡霊

5

訳者あとがき 275

解説 絵夢 恵 278

主要登場人物

- ジョン・パイパー……………アングロ・コンチネンタル保険会社の調査員
クイン……………新聞記者。パイパーの旧友
クリストファー・ペイン……………小説家
エスター・ペイン……………クリストファーの妻
アリス……………ペイン家の家政婦
フォールケンハイム……………ペイン夫人の主治医
ライオネル・ドーリング……………フォールケンハイムの共同経営者
リタ・バーネット……………フォールケンハイム医院の薬剤師
スチュアート・ヴィンセント……………保険会社社長
ホイル警部……………スコットランドヤード
ロンドン警視庁の警部
リン・キャツスル……………ペインの知人
ハリー・マツケヴオイ……………ライゲートのホテルの主人
ヴァルター・ステファネク……………ライゲートのホテルの従業員

ラスキン・テラスの亡霊

第一章

三月十一日、午後十一時四十分。エスター・ペイン夫人は、ラスキン・テラス十六番地にある屋敷のドアにキーを差し込んだ。邸内は静まり返り、ホールに灯る明かり以外、闇に包まれている。激しい雨が窓を打っていた。雪を運んできそうな冷たい風が、大波のように屋根にぶつかっている。雨に濡れた広い庭では、葉を落とした木々が、三月の手ひどい鞭打ちに悲鳴を上げるかのように軋んでいた。

ペイン夫人は玄関に入り、後ろ手にドアを閉めた。ホールは明るくて暖かく、大きな平炉で燃える薪の香りで満ちている。磨き上げられた建材と厚い絨毯が、暖かさの色調のハーモニーを織り成していた。夫人はコートのボタンを外し、暖炉のそばに近寄った。

階段の向こうでドアがあき、女性が姿を現した——部屋着を羽織った地味な女性で、布製のスリッパを履いている。丸みのある頑丈そうな体型。髪は灰色だが、顔には皺もなく肌も滑らかで、年齢は特定できない。静かな眼差しには何の感情も窺えなかった。たとえトラブルに見舞われたとしても、心の動きは決して表に出さないよう訓練されてきたのだろう。

ペイン夫人が声をかけた。「お疲れ様、アリス。わたしの帰りを待っていないなくてもよかったのにもう、休んでいると思っていたわ」

「そうしようと思つていたところに、お帰りのタクシーの音が聞こえたものですから、奥様」女性は近寄つて来て、両手を組み合わせた。「ひどい天気の後でございましたね。お寒いんじゃないませんか？ 何か温かいものでもお持ちしましょう——」

「いいえ。結構よ、アリス。もう、休んでちょうだい」ペイン夫人は暖炉のほうに顔を向け、だるそうに伸びをした。振り向きもせず尋ねる。「主人はもう帰っているのかしら？」

「いいえ、奥様。九時過ぎまではいらつしゃつたのですが」

「それなら、あなたがこれ以上起きている必要はないわ。今、思い出したの。今夜はとても遅くなるんだつたわ。だから、玄関の鍵はあけておいて。わたしが明かりを消すから」

「かしこまりました。では、お休みなさいませ」

「お休み、アリス。それから——」ペイン夫人は肩越しにちらりと視線を投げ、慇懃な笑みを浮かべた。「待つていてくれて、ありがとう。氣遣いに感謝するわ」

家政婦が姿を消しても、ペイン夫人はまだ暖炉のそばで煙草を吸っていた。図書室の時計が真夜中を告げる。彼女はホルルの明かりを消し、二階に上がった。足音を忍ばせていたが、アリスには女主人が踊り場ではし足止めたのがわかつた。それから夫人は自分の部屋に入り、ドアを閉めた。

笠で和らげられた読書灯の光の中で、ペイン夫人は服を脱ぎ、ナイトガウンに着替えると肩かけを羽織つた。自分の部屋と夫の部屋をつなぐバスルームに入り、薬棚から睡眠薬の入つた細長いガラス製のチューブを取り出す。チューブと水を入れたコップを手に自分の部屋へ戻り、ベッド脇のアームチェアにクッションを置いて寛いだ。

睡眠薬は二錠しか残つていなかった。その二錠を水で流し込み、コップと空からになつたチューブを、

ランプが灯る脇机に置く。

少ししてから、彼女は自分の部屋の二つのドアに鍵をかけ、ベッドの端に腰をかけた。時計が十二時半を告げたとき、彼女はまだ、部屋の隅の薄明かりの中で座っていた。

午前一時、クリストファー・ペインが帰宅する。自分のベッドへと向かう前に、彼は配偶者の部屋のドアをノックした。返事はない。もう一度ノックし、ノブを回してみる。鍵がかかっているのがわかったときには、思ったとおりでだと感じただけ。三度目のノックを試みることはなかった。一時十五分、彼はベッドに入り、明かりを消した。

エスター・ペインには、夫が帰宅したときの物音は聞こえなかったかもしれない。そのころにはもう、ベッドから床へとずり落ち、絨毯に顔を埋めて横たわっていたのだから。意識が完全に遠のく前に、彼女は何とか腕を伸ばし、ベッドカバーの端をつかんだ。身体が弓なりに醜く硬直しても、彼女の指がカバーの端を放すことはなかった。

屋敷は眠り続けた。風と雨が激しく窓を打つ。新たな一日が始まる灰色の冷たい空気——エスター・ペインの顔を覆い、大きく見開かれた目に黒い影を落とす灰色の空気の中に、一条の光が差し込んだ。

斜めに打ちつける雨に、湿っぽい夜明けの光がきらめくころ——彼女はすでに息絶えていた。

第二章

スチュアート・ヴィンセントは、アングロ・コンチネンタル保険会社のビルの一階に執務室を構えていた。フレスコ画が描かれた高い天井に鏡板貼りの壁。大きな部屋には、どっしりとした家具が据えられている——年に五千ポンドもの金を稼ぎ出す男だけが、所有が許されるような部屋だ。ガラス戸の本棚の横にはジェームズ一世時代風のデスク。その上には、ほっそりとしたクリスタルの花瓶に水仙が生けられている。デスクの背後の薄暗い一角に、大きな革張りのアームチェア。もう一方の隅には、戸棚つきの木製の台座の上に、古びた緑色の金庫が据えられていた。赤々と燃える暖炉の向かい側にはスチームヒーター。それに並ぶ二つの窓から、鈍い陽光が差し込んでいる。室内の空気は暖かく、煙草の煙や家具のつや出し剤の臭いを消すための芳香剤がスプレーされていた。

パイパーがドアを開けると、ヴィンセントはデスクから身を乗り出した。柔らかく湿った手を差し出し、歯を見せない笑みを浮かべる。「おはよう、ジョン。だいぶ春めいてきたんじゃないか？」

「また雪が降っていますよ」パイパーは答えた。「もし仕事をいただけるなら、この二、三カ月、カプリで過ごせるような仕事だといんですけどね」

「それは残念だな。確かに頼みたい仕事はあるんだが、このロンドンでの仕事だ」ヴィンセントはパイパーに煙草と火を勧め、自分の横にある椅子を顎で示した。「コートを脱いで、かけてくれたまえ。

このところ調子はどうかい？ しばらく見かけなかったが」

「何とか生きていますよ。派手なお手柄はなくても、辛うじて首はつながっています」パイパーは暖炉の火に手をかざし、椅子の肘かけに腰を下ろした。「アングロ・コンチネンタルからは、ずいぶん長いあいだ、お声がかかりませんでしたね。あなたが調査の仕事を、山ほどいるライバルに切り替えてしまったのかと思っていました」

「まさか、ジョン」ヴィンセントは指先を押し合わせ、再び微笑んだ。「きみにライバルなどいないと、まだわかつていないのかね？ うちの客がお行儀よくしているのは、わたしのせいではないだろう？ 押し込み強盗の偽装事件もなければ、都合のいい火事もなし。盗まれた宝石が質屋に持ち込まれることもなかった——きみに高い報酬を払っても妥当と思えるようなことは、何もなかったんだ。少なくとも——今週までは」丸々としたピンク色の顔から笑みが消えた。「ところがここに来て、きみに頼まなければならぬことが起こった。かなりの大金が絡むケースだ。つまらないことをあれこれ要求するつもりはないよ。好きなだけ時間をかけてもらっていい」

「どのくらい金が絡んでいるんです？」

「一万ポンドだ」ヴィンセントは重々しく答えた。「二、三週間前に亡くなったエスター・ペイン夫人の保険金として、当社は一万ポンドの請求に応じなければならなくなった。新聞で読んでいないかい？ 小説家のクリストファー・ペインの奥さんだよ」

「写真を見たような気がします。旦那のほうは、もちろん知っていますよ。夫人はどんなふうになつたんです？」

ヴィンセントは両手を擦り合わせ、顔をしかめた。「近いうちに、きみから説明を受けたいのが、

その点なんだ。現時点で我々にわかっているのは、三月十一日の夜、夫人が○・一五グラムほどのストリキニーネを呑んだということだけだ。彼女は翌朝、自分の寝室で寝巻姿のまま倒れているのを発見された」

「『呑んだ』というのは、それが何なのかをわかった上で摂取した、という意味ですか？」

「そうなのかもしれないし——」ヴィンセントは肩をすくめた。「そうではないのかもしれない。どちらにしても、可能性としては考えられる。もし、知つての上なら、警察はその入手先や自殺の動機について知りたがるだろう。ここだけの話だが、警察側ではほかの可能性についても考えていて、調査中なんだ」

パイパーが口を挟んだ。「もし、彼女に動機がないなら、旦那のほうにあったんじゃないかと警察は考えるでしょうね。自殺か他殺、そのどちらかのはずです。夫人が誤つて、そんなに大量の毒物を呑むことはないでしょうから」

「それもまた、可能性の一つだよ」ヴィンセントは椅子に背中を預け、天井を見上げた。「もし、それが正解なら、フォールケンハイム医師は廃業しなければならなくなるかもしれない」

「どうして、その医師が関係してくるんです？」

「ペイン夫人の直近の主治医なんだ。時々、彼女に睡眠薬を処方していた」

「睡眠薬にストリキニーネなんか入っていないでしょう」パイパーが反論する。「その医師が、夫人に誤つて薬を過量摂取させることなんてできないですよ」

「いやいや。ストリキニーネの錠剤をほかの錠剤に混ぜることはできたはずだ」ヴィンセントはゆっくりと視線を落とし、一人で頷いた。「警察もそう考えている。もちろん、フォールケンハイム医師

は、否定しているがね」

「どんな医者でも否定するでしょうね。ストリキニーネは、医学的にはほんの少量でしか使われないものなんです。〇・一五グラムなんて量で使われることはありません。馬でも殺せるほどの量ですから」

「ペイン夫人を殺すにも十分な量というわけだ。それに、密やかに囁かれている話もある——」ヴィンセントは机の端に膝を押し当て、椅子の後ろ脚でバランスを取った。「単なる噂だがね。あの先生は二股をかけていると。つい最近まで、その医者と夫人は——非常に親密な仲だった、と言えはいかな？」

「そんなばかなことをするなんて、よほどどうかしていたんでしょね。毒物を溜め込んでいたことについては、何か説明しているんですか？」

「いいや、まったく。でも、ペイン夫人が厄介になり始めたなら、そんなこともしていたかもしれないね。緊急事態に備えて、と言うだけで、医者には薬を溜め込むいろんな方法があるんだ。心臓病患者に関わるたびに、処方薬にストリキニーネを加え、実際に渡す薬からは除外しておけばいいんだから。長年に渡って、記録には残らないように薬をストックしてきたんだろう」

「もし彼が、すべての調剤を自分でやっているなら可能でしょう——」パイパーが口を挟んだ。「従業員は使っていないかったですか？」

「いいや、時々、若い女性が一緒に仕事をしている。しかし、その女性も、一週間びっしり働いているわけではないからね。彼女が夜間いないときには、フォルケンハイムが自分で薬を処方するのは周知の事実だった」